説教「永遠の命」

詩編　三七・二三～二九
マルコ一〇・一五～二二
牧師　森田恭一郎

今日はご遺族の皆さまと共にささげる召天者記念礼拝です。教会は「永遠（とこしえ・えいえん）の命」を信じます。そのように信仰の告白をしています。

永遠とは無限ということではありません。時間の長さ、時間の量を言っているのではありません。時間の長さではなく質です。いつしか健康寿命と言われるようになりました。平均寿命が延びて、私たちは知っている。ただ長生きすれば良いということではない。質を考えるようになった。命の質です。**この命の質とは何があれば質が高いと言えるのか。これが今日のテーマです。**

英語でＱＯＬ、クオリティ・オブ・ライフと言いますが、このライフを日本語でどう訳すかで質を考える中身が代わってきます。①ライフを生命と訳せば、常識的に言いますが、健康であれば生命の質は高い。私たちが病院に行くのは、この生命の質の回復、向上を求めるからです。②ライフを生活と訳せば、日常生活の質です。生活を営むのに必要な衣食住、財産です。今。多くの人がスマホを持っています。スマホがないより在った方が生活が便利になり生活の質が向上します。今や無くてならない物になりました。ＡＩも便利な道具になりそうです。③ライフを人生と訳せば、人生の質。やりがいがある、使命がある。生きている充実感を味わっている。皆さんの御自分の人生の質は如何ですか……。

ライフの訳としては、生命、生活、人生なのですが、私はこの訳も加えたい。それは関わりです。④として関わりの質、人間関係です。孤独より社会関係の中に歩みたい。喧嘩ばかりしている友人関係、家族関係より、お互いに支え合い信頼し合う関係の方が関わりの質が高いと言えるでしょう。もちろん、自分は孤高に生きるのが良いのだ、と言う方もおられるかもしれませんが……。⑤そして関わりの質は神様との関わりの質です。聖書が語る永遠の命は神様との関わりの質のことです。長生きに超したことはありませんし、健康寿命を願いますが、そこで生きる質を表す聖書の言葉が永遠の命です。

もうお気付きだと思いますが、永遠の命は地上の人生を終えた後の話ではなく、今、私たちがこうして生きている地上に人生においても、生きることが出来るし、招かれている永遠の命です。

今日の旧約聖書も永遠の命を表現している言葉です。**主は人の一歩一歩を定め、御旨にかなう道を備えて下さる**（詩編三七・二三～）。一歩一歩。何か余韻のある言葉です。ある説教者（小島誠志）はこう語ります。**「見通しの効く道を歩ませて戴けたら、どんなに嬉しい事でしょう。しかし、神はそんな道を備えて下さいません。ただ今日一日、目の前の一歩一歩を備えて下さる。神が拓いて下さる一歩一歩を踏みしめて、命に向かうのです。一気に駆け抜ける、という訳にはいきません」**。神が備えて下さるこの一歩一歩と信じて歩む。これは永遠の命の中を歩む姿ですね。今日用意しました納骨者名簿、私の存じ上げない方も多いのですが、皆さん、一歩一歩を歩まれたに違いありません。天寿を全うされた方もおられましょうし、病や事故で若くして亡くなられた方もおられましょう。中には自ら命を絶たれた方も。

自分の人生を振り返って、自分はあの時、一歩一歩を踏み損なった、と思い起こすこともあるかもしれません。それもその人の、その時々の歩みです。詩編は続けます。**人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手を捕らえて下さる。**先の説教者こう語ります。**「険しい道です。歩いて行けば力尽きることもあります。力尽きて倒れるのです。神にすがっていたこの手も放（はな）れてしまいます。しかし私たちの手は放れても、神の御手は私たちを捕らえていて下さいます。力尽きて倒れても、その力尽きた私たちを、捕らえていて下さる方がいる――それが私たちの信仰です」**。

主が捕らえていて下さる。これは信じる事です。信仰の事柄です。信じて生きることが出来るとき、困難の中にあっても永遠の命の中を生きています。生かされています。地上にあっても、召されて天上にあっても、主の御手があると信じます。

主イエスは、**子どもたちを抱き上げ、手を置いて祝福**（マルコ一〇・一六）して下さいました。**神の国はこのような者たちのものである**、と仰いました。きっと良い子もいたでしょうけれど、いたずら坊主もいたに違いない。でも主イエスが手を

置いて祝福下さいました。この子どもたちは、笑顔です。祝福されて永遠の中に包まれています。

その後登場する人。彼が主イエスに尋ねました。**「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」**。何をすれば良いのかと訪ねたので、それに応えて主イエスは言いました。**「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神お一人の他に、善い者は誰もいない。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ」**。**すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。**何をすれば良いのか。永遠の命は私たちの側の行ったことによってご褒美のように勝ち取ることが出来るものなのでしょうか。

イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」。その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。ここで主イエスがお求めになっておられるのは、持ち物を売り払って貧しい人々に施すという善い業ではありません。彼は財産家で、それが神様に祝福されている結果だと思っていたようです。それを売り払う、施す、出来ませんでした。それでは一歩一歩を踏み損なってしまいます。**主イエスは彼を見つめ、慈しんで言われました。**彼は主イエスの眼差しとお心を見逃しました。

主イエスがお求めになったのは、そういう地上の財産にとらわれるのではなく、天に富を積む、天に希望を繋ぐこと。そして主イエスに従うことです。主イエスの眼差しと慈しみに気づき、主イエスから祝福を受けることです。主イエスが彼の手を捕らえて下さる事にただ身を委ねることです。

先の名簿に名が載っている方々、夫々の人生を歩まれた。そのお名前を見ながら私たちが、例えば親御さんのお名前だったり連れ添った配偶者だったり、思い起こす事は**「こんなことをしてもらった」と感謝の思い**もあれば、お子さんのお名前で**「十分なことをやってやれなかった」と悔いや謝る気持ちであったり**、きっと様々です。あるいは名簿には載っていない、流産、死産のお子さんもおられるかも知れない。本人にはどうしようもない、やりようがない、生まれないままの人生だった。様々の、人生です。

でも、その誰に対しても例外がないのは、主イエスがその一人ひとりの存在と人生を、十字架で一人ひとりの罪を負い贖って、御自分のものとして下さった。一人ひとりの手を捕らえて下さっておられる。**このイエス・キリストから指し出されている関わりの出来事です。**召された方々の永遠の命は、この関わりの中にある天の事実です。そう信じます。

そして地上の私たちには**「私に従いなさい」**と主イエスからの関わりの祝福の中に招かれています。永遠の命の中に招かれています。